

編集後記

前号にひきつづき、今号でも二つの充実した特集をお届けすることができました。

まず、沖繩本土復帰五十周年に合わせ、昨年度末(二〇二二年)の二月に開催されたシンポジウム「受け継ぐもの」の登壇者による原稿の寄稿と、そのシンポジウム内で行われたデイスカッションの記録からなる特集です。この特集は、沖繩の固有の言語と伝統民藝文化をいかに受け継ぐかという問題に焦点を当てたものですが、詳細についてはシンポジウムを企画してくださった英文学部の平岩健先生による「緒言」をご覧ください。平岩先生、登壇者の皆さま、そしてデイスカッションに参加していただいた方々に心からの感謝を申し上げます。

そして、もうひとつの特集は、昨年

度末の三月に開催されたシンポジウム「十五〜十八世紀ネーデルラントとオランダ美術における複製／コピー」の報告および登壇者による原稿の寄稿です。このシンポジウムでは、複製とコピーが美術においてどのような機能を果たしてきたかという問題をめぐって、四名の美術史研究者が異なる時代の作品を分析し、ネーデルラントとオランダ美術の地域性と関連づけながら議論が行われました。シンポジウムを企画してくださった芸術学科の青野純子先生をはじめ、特集の企画に関わってくださった皆さまに深く感謝申し上げます。

これらの特集に加えて、今号ではさらに三つの文章をご寄稿いただきました。一つ目は、明治学院大学を会場にして開催された日本映像学会のシンポジウム「東アジア・情動・フェミニズム」において韓国総合芸術大学の金素榮(キム・ソヨン)先生が行った基調講演の原稿です。二つ目は、明治学院大学のアートホールで開催された詩と音楽の共同作

業「UK Poets」にかんする英文学部のポール・ハラ先生の報告書です。そして三つ目は、言語文化研究所の読書会「ホームロス研究会」の代表による活動報告です。これらの寄稿者の皆さまに心から感謝申し上げます。

ここからは「言語文化」の紙面を離れ、本誌を刊行している言語文化研究所の二〇二三年度の活動について簡単に紹介させていただきます。

まずは今年度開催することができたイベントについてです。ちょうど一年前に刊行された第四十号の「編集後記」を見返してみると、「前年度にひきつづき本年度(二〇二二年度)も、とくに前半は、新型コロナウイルス感染拡大のため、やはりイベントの開催にかんしては困難な状況がつづいた……」とありますが、今年度はそのような状況が一変し、数多くの充実したイベントが、しかもすべてコロナ前と同じような「対面形式」で開催されました。具体的には、五月にフランスから文学研究者アンドレア・スケリー

ノ氏をお迎えした講演会や、日・仏・独の研究者を集めた国際シンポジウム「アフォリズムの通念——日仏独文学をめぐって」、さらに前述のイベント「US Poets」などが開催され、それを皮切りに七月にはイベント「音楽と演劇のコラボレーション——藤倉大×岡田利規、音楽劇『リビングルームのメタモルフォーシス』をめぐって」が、そして十月にはフランスの舞台衣装デザイナーのコレット・ウシャル氏をお迎えした講演会、そして十二月には、アメリカ合衆国から

アメリカ現代詩とセルビア詩の研究者の二名をお迎えした講演会「核兵器による絶滅意識とアメリカ詩／東ヨーロッパとアメリカ詩」を開催することができました。どのイベントもたいへんな盛会であったと伺っています。

次に、読書会についてです。「ホメーロス研究会」「スワヒリ語講座」「戯曲を読む会」は今年度もオンラインで開講されましたが、「古典ギリシャ語初歩文法講座」については対面形式で開催されました。来年度の読書会開催の有無や開講

形式の詳細については、言語文化研究所のホームページをご参照ください。また、前号で「ホメーロス研究会」が今年度で通算一〇〇回を迎えたことをお知らせしましたが、今号でも同研究会に関する「統報」が掲載されていますので、ぜひご覧ください。

来年度、二〇二四年度の言語文化研究所の活動、そして本誌『言語文化』の内容も、本年度以上に充実したものとなるはずです。今度の活動に期待していただければと思います。
(齊藤哲也)